

Title	「おれは誰だ」 : 『指物師グラッソ(il Grasso Legnaiolo)のノヴェッラ』 ノート
Author(s)	米山, 喜晟
Citation	大阪外国語大学論集. 11 p.119-p.143
Issue Date	1994-08-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79646
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「おれは誰だ」 — 『指物師グラッソ (il Grasso Legnaiolo) のノヴェッラ』 ノート

米 山 喜 晟

第一章 アンドレ・ロシヨンの作品研究

本ノートで扱う『指物師グラッソのノヴェッラ』は決して特別長いものではないが、ルネサンス期フィレンツェの芸術の発展にとって決定的に重要な芸術家フィリッポ・ブルネッレスキ¹⁾を悪戯の仕掛人として登場させ、15世紀末のフィレンツェの学者政治家アントニオ・マネッティ Antonio di Taccio Manetti²⁾をテキストの作製者の一人としていて、15世紀以来度々刊行されて来たことから明らかなように、ルネサンス期フィレンツェ市民の間で人気が高かったユニークなノヴェッラである。さらにたとえばルネサンス期イタリア文学に現れる「悪戯」に関してフランスで行われた共同研究においても、その成果『ルネサンス・イタリア文学における《悪戯》の形態と意義』³⁾の編集者であるアンドレ・ロシヨン自身がこの作品を担当し、⁴⁾その第二部の最後で付録も含めると166ページも及ぶ、同書の中では異例に長文の、したがって少なくとも紙数に関しては論じられている作品自体の何倍にも及ぶ研究を発表を発表して、この研究書の掉尾を飾っているという事実がある。この共同研究は必ずしもノヴェッラに限らず、文学全般に見られる悪戯を対象としていて、『廷臣論』⁵⁾の悪戯なども論じられているのだが、実際には大半がノヴェッラを扱っているので、実際的には一種のイタリアの悪戯ノヴェッラにんかする共同研究に近いもので、その中でこの作品が占めている比重によっても、この作品をイタリア・ノヴェッラ中の重要な要素である悪戯ノヴェッラの代表的な作品の一つだと思えることが可能であろう。本ノートはすでにこれまで進めて来た一連のイタリア・ノヴェッラ紹介の一部だが、従来のようなノヴェッラ集全体の紹介の代わりに、一篇で独立して存在しているこの作品を紹介するかたわら、その異本をも紹介して、その存在や発展の実態を示すと同時に、これまで私がイタリア・ノヴェッラに関連して何度も触れて来た悪戯ノヴェッラについて、ロシヨンの研究を基礎にして若干の考察を加えておきたい。

そこで本ノートはまずロシヨンの研究をほんの少しかいつまんで紹介することから始めよう。中世イタリアの単一のノヴェッラとしては比較的長い作品だとしても、ウテット社の古典全集版でせいぜい40ページ前後⁶⁾の一作品を対象として、ロシヨンが付録を加えるとほとんど一巻のモノグラフとしてもおかしくない分量の論文を展開していること自体に、筆者はまず好奇心を掻き

立てられたことをここで白状しておかなければならない。じつはロシオン自身が自分の研究の特質を示しているともたれなくはない一文を論文中に記している。それはマネッティがこの作品により豊かな意味の解決を与えることを好んだとコメントしたのに続く、「この豊さは我々に、全体的で包括的な解釈を提案しないよう、また無理やりでもよいからすべての錠を開く《その》魔法の鍵を求めたりしないようにすすめ、こうした野心的だが軽率な試みの代わりに、その各々が真実の一片を構成しつつ、その結合したものが悪戯の複雑さを全体的に理解させるなどとは主張しない諸解釈の扇で置き換えることをすすめる」⁷⁾ という文章である。これはたとえば筆者がこれまでに何度か批判的に紹介してきたプレザンスのグラッツィーニ論⁸⁾と対極的であるとも言える態度である。マゾヒズム、同性愛的傾向、被害者との同一化、去勢願望等のキーワードで従来のグラッツィーニ像を一新する新しい精神分析的解釈、つまりは魔法の鍵を発見したと主張しているプレザンスとは対照的に、ロシオンは全体としてグラッツィーニの作品の約8分の1程度の作品を、四方八方から網をかけてとらえ、必要に応じて各部分をクローズ・アップして見せ、そのため本文だけでもグラッツィーニ論の2倍以上の紙数を要したと言える。しかもロシオンは最初から、そうした分析がもたらす成果はごく断片的なものの寄せ集めであると断り、いずれにしても画期的な結論など出る筈もないと断っているのである。

こうした方法論から当然予想されるとおり、ロシオンのアプローチはあくまでオーソドックスである。まずルネサンス期に人気が高かったという事実とこのテキストが含んでいる興味深い問題にもかかわらず、まだバルビの研究⁹⁾以来これまでにモノグラフが一つもなかったことを指摘した短い序文の後に、以下の4章が続く。Ⅰ. アントニオ・マネッティ版の形成、Ⅱ. 悪戯の歴史的《真実》とノヴェッラのフィレンツェ的性格、Ⅲ. 悪戯の仕掛人達の巧妙さと悪戯の機能性、Ⅳ. 悪戯の被害者の心理的研究とこのノヴェッラの意味。

第一章はマネッティ版とそれが刊行される以前に普及していたV版とを比較して両者の様々な異同を明らかにし、相互の関係を示しながら、マネッティ版において何が新しく付け加えられたかを示している。それが占めているページ数は必ずしも多くはないが、本研究を価値付けた労作である。本ノートが紹介しているプロカッチョーリ¹⁰⁾のテキストの選択も基本的にこの成果の線に沿っている。

ロシオンは、作品全体をⅠ. 最初の晩餐。Ⅱ. 自分の家の戸口のグラッソ。Ⅲ. グラッソの逮捕。Ⅳ. 牢獄の中のグラッソ。Ⅴ. サンタ・フェリチタ（教区）のグラッソ。Ⅵ. 自宅に戻ったグラッソ。Ⅶ. サンタ・マリーア・デル・フィオーレ教会の論議。Ⅷ. 悪戯の解決。Ⅸ. エピローグ。の9段階に分け、さらに各段階をいくつかの要素に再分割して各々の版がその内のどの要素を含んでいるかを、一覧表として示している。さらにこれは筆者の理解を越える作業だが、Vテキストについてその基となった写本の二つのグループの差異を検討し、また今世紀にミケーレ・バルビが刊行した写本 Palatino 200¹¹⁾との異同にも検討を加えた上で、さらに巻末に3つの写本と一つの断片¹²⁾の校訂版を掲載して参考資料としている。これだけでも気の遠くなるような作

業である。

ロシオンはテキストVの成立時期を、ほぼブルネッレスキが生きていた時期である1409～50年、さらにくわしくはおそらく1430～35年頃と推定。Palatino 200 の成立は1470～78年、そしてマネッティ版の草稿成立は1470～97年、さらに恐らく1480～87年と絞り込んでいる。¹³⁾ また果してマネッティ版の執筆者が本当にマネッティかという問題を検討し、1. この作品や同じ作者の手になるブルネッレスキの伝記¹⁴⁾ を書くためには、フィレンツェの歴史や芸術家に関する独特の関心や知識が必要だが、バルビの心理的文学的考察によると、この時代にそうした要件を最も満たし得ると思われるのはマネッティであること。2. 近年のザールマン H.Saalmann¹⁵⁾ やタントゥルリ G.Tanturli¹⁶⁾ の文献学的研究が、テキストの筆跡等から、やはりマネッティを妥当だとしていること。3. 最後に1. と似た理由のような感じもするが、他の同時代の何人かの候補者を吟味するとうまく当て嵌まらないこと、という3つの理由を挙げて、やはりマネッティ以外には考えられないという結論に達している。無責任な感想が許されるならば、やや循環論法的な印象も否めないが、『ブルネッレスキ伝』の存在が、グラツツをめぐるノヴェッラの執筆者に関しても、強力な手掛かりを与えているようである。

それでは問題のアントニオ・マネッティ (1423～1497) とは何者か。元来数学者や天文学者としても名高く、たとえばダンテの地獄の位置を当時の科学に基づいて論じたり、グイド・カヴァルカンティに関するメモを残すなど、フィレンツェおよびフィレンツェ人の業績に関する多くの問題に関係しており、建築や芸術への造詣も深くドオオモのファッチャータのデザイン・コンクールを審査したりファッチャータの製作に助言を与えた委員会のメンバーの一人でもあったという。彼は当時フィレンツェを支配していたメディチ家の党派の有力メンバーで、絹織物のアルテに所属する古い名門都市貴族の一員であり、1470年ボノーミニ、1471年バリエア委員、1476年プリオーレ、1495年の正義の旗手等、コムーネの要職を歴任し、ヴァルダルノ・ディ・ソブラ、ヴァルディニエーヴォレ等のヴィカーリオ (代官)、コッレ・ディ・ヴァル・デルサのポデスタ (司法長官) 等、かなりの役職も歴任した政治家でもあり、ヴェネツィア政府と交渉してダンテの遺骨を取り戻す交渉をしたことでも名高い。¹⁷⁾

第二章はノヴェッラの歴史的背景およびこのノヴェッラのフィレンツェ文学の伝統との関連の解明である。当時悪戯が日常的に行われていたが、このノヴェッラが史実に基づいているのかどうかも検討されている。ロシオンは1409年当時ブルネッレスキがフィレンツェにいたという証拠はないとして、『ブルネッレスキ伝』等のこれが実話であるという説に対しては、勿論完全な断定はしないまでもかなり否定的¹⁸⁾ である。あわせて登場人物の階級、当時のフィレンツェの国際関係等もろもろの歴史的背景に関わる問題を論じ、さらには噂以外では女性がほとんど登場しない理由等を社会史の成果との関連から明らかにしている。

第三章はさらに作品に則した、ブルネッレスキとその仲間達悪戯の仕掛人と判事、司祭等、意識的無意識的な悪戯の協力者、双方あわせて8人の行動や役割の分析である。当然特にブルネッ

レスキについては、その属性や役割についての詳細な分析が行われている。

第四章では再びグラッソの職人性その他の属性が取り上げられ、母をめぐる問題にも触れられる。そしてマネッティがまとめたノヴェッラの4つの時間（モメント）を順次に分析し、その心理的豊さを強調する。最後にロシオンはすでに見たように、全体的包括的な一元的な解釈の可能性を一応否定しながらも、このノヴェッラに含まれたメッセージを解読している。そのメッセージとは何か。それはまとめの章で再び取り上げるが、マネッティがこの作品をまとめた時代に再び意味を持ったとされる、ブルネッレスキ問題、つまりはブルネッレスキの勝利である。たとえば作品に全く登場しない女性に関してすら繰り返して論じられているように、ロシオンは同じ問題を何度も取り上げながら、螺旋状に作品の解明を進めていると言えそうである。せっかくの労作の紹介としてはあまりにも不十分であるが、本ノートの真意はあくまでイタリア・ノヴェッラ自体の紹介であるので、テキスト自体の紹介に移ることをお許しいただきたい。

第二章 マネッティ以前の代表的テキストの2例

1990年パルマからプロカッチョーリ（Paolo Procaccioli）の手で『指物師グラッソのノヴェッラ』の校訂版¹⁾が刊行された。冒頭に付けられた、80才近い作家マンガネッリ（Giorgio Manganelli）の紹介は優れた散文によってではあるが、学問的にあまり意味のない作品の要約と解説に留まっている。しかしプロカッチョーリの同書に収録した3つのテキストは、我々がすでに見たロシオンの研究等近年の成果を取り入れて編集された、近年のテキスト・クリティークに基づく本作品の代表的テキストにほかならない。ところで彼はそれらのテキストを、

I. LA REDAZINE DI ANTONIO MANETTI.²⁾

II. LA REDAZIONE DEL CODICE PALATINO 200.³⁾

III. LA REDAZIONE VULGATA.⁴⁾

と時代の流れや完成度とは逆の順に収録している。しかし本ノートでは、やはり本来の成立順にしたがってテキストⅢ. → テキストⅡ. → テキストⅠ. の順で要約して紹介する。本章ではまずマネッティのテキスト以前に成立したと思われるテキストⅢ. とⅡ. を示す。

1. LA REDAZIONE VULGATA.⁵⁾ 要約

1409年のある日曜の夜、いつもの習慣通りフィレンツェの貴族、トンマーソ・ペーコリ Tommaso Pecori の家で若者達の一団が晩餐にあずかった。その後暖炉にあたっていた際、一人が常連のマネット・アマンナティーニ Manetto Amannatini がいないことに気付いた。マネットは嵌木細工や女性用テーブル等の腕の良い親方で、聖ジョヴァンニ洗礼堂の広場に店を持っていて、年齢は28才位で大変愉快だがどちらかというと怒りっぽい男だった。彼は太柄で肉付きが良かったのでグラッソ（でぶ）と呼ばれていて、いつもその仲間と一緒に愉快に過ごしていた。

彼らはその晩グラッソが何度も誘われていながら、来るといわなかったことで馬鹿にされたように感じ、またその理由をあれこれと詮索している内に、彼がいつものように何かの気まぐれで来なかったものと想像し、誰ともなく今後は彼の気まぐれに振り回されないよう彼に悪戯を仕掛けることに決めた。当初はグラッソに夕食をおごらせる程度の計画だったが、その実力によって広く知られ、グラッソととても親しいフィリッポ・ディ・セル・ブルネッレスコ Filippo di Ser Brunelleschi (文中ではフィリッポと記されるが、本論ではブルネッレスキで統一) が、「ずっと仲間で楽しめるような悪戯をやろう。グラッソに彼自身から別人に変わったと信じこませるのだ」と提案。仲間は不可能だというのが、ブルネッレスキは皆にそのやり方を説明、グラッソに自分がマッテオ Matteo と言う男だと信じこませることにして、それぞれの分担を割り当てた。翌日の夕方職人がそろそろ店 (=bottega 仕事場を兼ねる) を閉める時刻に、誰よりも彼と親しいブルネッレスキは、グラッソの店の前で彼としばらく立ち話をする。そこへ男の子がいそいでやって来て、ブルネッレスキはどれかと尋ね、二時間前に彼の母親が事故にあって死にかかっているのですぐに家に帰るよう伝えた。グラッソは心配して同行しようと言うが、ブルネッレスキは必要があれば呼びにやると断り、すぐさまサンタ・レパラータ教会 (改名し改築する前の現在のドォオーモ) の前にあるグラッソの家に行き、ナイフで入り口を開けると、中に入り錠をおろす。グラッソには母がいたが、その時期にはボルヴェローザにある農園へ洗い物をしに出かけていて、そのころ帰宅するはずだった。グラッソはブルネッレスキから使いが来ないので、夜の一時 (日没約一時間後) 頃帰宅し、階段を二つ上がってドアを開けようとしたが、開かない。母が戻ったと信じて、グラッソはドアを叩いて「誰だ、開けろ」と言う。ブルネッレスキは家の中にいて、階段のてっぺんから、グラッソの声色で、「そこにいるのはだれだ」と叫ぶ。再びグラッソが「開けろ」と叫ぶと、ブルネッレスキは自分がグラッソで相手がマッテオのようによそおって「マッテオ、今は取り込み中だ」と言い、外に聞こえるようグラッソの声色で、帰って来たばかりらしいグラッソの母に対して、彼女が遅く帰宅したことを叱りながら、夕食の準備をする振りをする。グラッソが戸惑いつつ二つの階段を降りた所へ、かねての打ち合わせ通りドナテッロが現れ、「今晚は、マッテオ。グラッソを探しているのか」と尋ねたので、ますます混乱して半ば呆然となり、広場で知人が通りかかるのを待つことにした。やはり予定通り、商業裁判所 (mercantantia) の4人の警吏と会計係公証人が現れて、公証人が警吏に「こいつを連行せよ。私が担当する負債者だから。散々追っかけてやっとつかまえた」と命じた。勿論グラッソは、自分に関知しない、人違いの逮捕だと抗議したが、公証人は「おれが自分の負債者を知らないというのか」とか、「組合に判決が下りておう一年になる。マッテオではないとしらをきるのか」と訴えて連行させ、マッテオの名で文書を作成して牢屋に閉じ込めさせた。騒ぎを聞いた囚人達は「今晚はマッテオ、どうしたのだ」という。グラッソは皆からマッテオと呼ばれて自分も信じそうになる。囚人達は彼に夕食を分けてやり、汚い隅っこで寝かせた。グラッソは自分がマッテオかグラッソかと、朝まで思い悩み続けた。朝牢屋の窓から知人が来ないかと待っていると、前日

油絵のてっぺんにつける飾りを彼が仕上げてやった、フィレンツェの名門ルチェッラーイ家のジョヴァンニ Giovanni di messer Francesco Rucellai が現れた。グラッソが嬉しさのあまりにやにやして彼を見ていると、ジョヴァンニは全く彼を知らないように、「何を笑っているんだ」という。グラッソが、「お前さんはサン・ジョヴァンニ広場で嵌木細工をしているグラッソを知っていますか」と尋ねると、「知ってるとも。奴とは大の親友さ」と言う。「じゃあ、彼を尋ねて商業裁判所に友達がぶち込まれている、と伝えて下さい」と頼むと、ジョヴァンニは喜んでそうしようと立ち去る。その後ろ姿を見たグラッソは、自分がマッテオになったと信じこむ。当時ある有能な判事が借金が払えないため投獄されていたが、グラッソの知人ではなかったけれども、グラッソのあまりの落胆ぶりを見て、「わずかの借金ならそんなに嘆くにあたらない。どうして友人や親戚に使いをやって頼らないのかね」と尋ねる。グラッソは彼を片隅に引っ張って行き、「あなたは私を知らないが、私はあなたを良く知っている。実は私が悲しんでいるのはわずかな借金のためではないのです」と言って、自分が沈んでいる事情を事細かに打ち明け、「講座(Studio) でいろいろな本を講義しておられて、古今の多くの著者の作品や歴史に通じておられるあなたはひょっとしてこんな例をご存じではありませんか」と尋ねる。判事はそれを聞いて、相手は狂っているか、悪戯のためかの二つに一つだと考えたが、「別人に変わった例は珍しくない」と答えた。グラッソが「自分がマッテオになると、マッテオはどうなりますか」と尋ねると、判事は「勿論グラッソになっている」と教えた。やがて夕方にマッテオの二人の兄弟が商業裁判所に現れて、マッテオという名前の弟(兄弟三人の年齢の順序は不明だが一応こうしておく)が投獄されていないか、もしいるなら払ってやるから借金はいくらかと会計系の公証人に尋ねる。トンマース・ペーコリの親友の公証人は万事情を心得ていて、帳簿をめくる振りをして必要な金額を教える。マッテオの兄達は「その前によく話しておきたい」と言い、窓のそばの男に「マッテオの兄達が引き取りに来たから、彼にこっちへ来させて」と頼み、グラッソが来ると、長兄が「マッテオよ、これまでお前には散々注意しただろう。しかしお前はわたらの懐をあてにして浪費して、我々に散々払わせた。今度は我々の名誉の問題やお袋の頼みがなければもっとずっとお前をここへほおっておくつもりだったが、やっぱり今度も借金を払ってここから出してやることにしたから、今晚人が少なくなったアヴェ・マリーアの祈りのころ連れに来る」と述べた。グラッソは心を入れ換えて二度と恥は掻かせません云々、と適当に答えて必ず釈放してくれるように頼んで別れた後、判事に「私はどこへいきましようか。家に戻りグラッソがいたら気違い扱いされるだろう。もし彼がいなければ母はおれを探させていたはずだ」と相談。判事はマッテオの兄弟について行けと勧めた。夕方兄弟が来て債権者との話しをつけたことになり、会計系の公証人が鍵を持って来て「マッテオはだれだ」と尋ねると、グラッソは「私です」と進み出た。公証人が「兄さん達が借金を払ってくれた」と彼を釈放したので、彼は兄弟と共にすでに暗くなった町に出る。彼らはサンタ・フェリチタの近くのサン・ジョルジョ坂の上り口にある家へグラッソを連れて行き、一階の部屋で「夕食までここにいな」と言う。暖炉があって食卓が準備されたその部

屋にグラッソを残すと、一人がサンタ・フェリチタ教会の神父の許へ行き、自分達は近くに住む三人兄弟だが、昨晚自分の弟のマッテオが負債で商業裁判所に拘留されたことや、お金を払って引き取って来たことを告げた後、逮捕された時マッテオはとてもショックを受けて、余りにも気落ちしたため、自分はマッテオではなくて、サンタ・レパラーの近くに住む指物師のグラッソだという考えにとりつかれてしまったと話した。そしてもしも一度そんな考えを人にきかせると、たとえ後で正気に戻っても一生気違いだと思われるから、どうか自分達の家まで来てマッテオと会い、何とかそういう考えを取り除いてほしい、と要望した。神父は快く引き受けて、グラッソのいる部屋へ行き、「今晚は、マッテオ」と話しかけ、自分のそばに座らせると、「ここへ来た訳は、いやなことを聞いたからだ。君が借金のために商業裁判所につかまった時、憂鬱のあまり気が狂いそうになり、色々馬鹿なことをしたと聞いたが、その中で君は自分がマッテオではなくてサンタ・レパラーのそばに住む指物師グラッソだと言い張ったそうだね。このことだけは今後もう二度としないと私に約束して欲しい。どうかそういう考えは頭から取り除いて、他の人々のように自分のことに専念して欲しい。もし君が自分から抜け出したと人々が知ったら、将来どんなに正気に戻っても、もう人々は君のことを正気を失った失格者だとしか思わないから」と、懇々と諭した。グラッソは愛情に溢れた忠告を聞いて、たしかにおっしゃる通りだから、今後自分をマッテオ以外の何者でもないと思っていて、たしかにそう思うが、もし出来ることなら、自分が彼でないことを信じるために、一度だけグラッソと話したいと懇願した。神父は「そんなことをする必要は全くないし、そのことを話せば話すほど、ことがばれてしまう」と止め、もうそのことを話さないと約束させると、グラッソのいない所で兄達に彼が約束したことを伝えて教会へ戻った。先程神父が話した部屋へブルネッレスキがひそかに小さな壺に飲み薬を入れて訪れると、夕食の時それをこっそりとグラッソに飲ませるようにすすめ、それを飲むと約6時間何も知らずに眠り続けるので、5時頃に残りのことを片付けると約束する。兄弟は夕食を始め、言われた通り3時頃グラッソに薬を飲ませると、食事をすませ少し暖炉に当たっていた時、グラッソは激しい睡魔に襲われて、「こんな強い眠気を感じたのは生まれて初めてだ」といいながら、靴を脱ぐのもそこそこにベットに倒れて豚のような大鼾をかきながら眠りこける。約束の時間に三人の仲間と現れたブルネッレスキは、編み籠にグラッソを入れて彼の自宅へ連れて戻り、ベッドに寝かせて普段の通り毛布をかぶせ、寝室の鉤に掛けられた仕事場の鍵を借りると、グラッソの仕事場に入り、鉋、ハンマーその他のあらゆる道具を反対側で反対向きにひっくり返しておく。翌朝のアヴェ・マリーアの祈りの時刻に目をさましたグラッソは、サンタ・レパラーの鐘を聞き、隙間から差し込む光の自宅にいることに気付く。何が何だか分からず神に祈り、仕事場へ行くと道具がめっちゃめっちゃになり大混乱の状態を見出した。びっくりした彼が道具箱を整頓していた時、マッテオの二人の兄弟が現れ、グラッソには全く見覚えがない様子で、「こんにちは、親方」と言う。グラッソは彼らを見て顔色を変えるが、「こんにちは、何を探しているんです」と尋ねると、二人は自分達にはマッテオという弟がいたが、逮捕されたショックで頭がおかしくなり、自分のことをこ

ここに住む指物師グラッソだと言い張るので、散々忠告したあげく、昨夜は神父にも来てもらって何とか誤った考えを頭から除くと約束させたことを語った。ところがこうして眠りについたマッテオは朝起きて見ると家を出て行方が分からぬので、ひょっとして親方グラッソの所へ行っていないかと探しに来たと語る。驚いてその話を聞いていたグラッソは、「そんなことは何も知らない」と言い、「もしもマッテオがここへ来て自分がグラッソなどと言ったら、大変ひどいことで、自分との間で大喧嘩になっていただろう。二日前から何て事だ」と答えたが、しゃべっているうちに腹を立てたグラッソは、マントを取ると二人をおいたまま、獅子のような勢いでサンタ・レパラータ教会へと駆け込んだ。その後間もなくそこにかつての仲間がやって来た。二人は以前テルマのペッレグリーノ・デッレ・タルシエ Pellegrino delle Tarsie 親方の許で修業した仲間で、このかつての相棒はすでに何年も前にフィレンツェからハンガリーへ出掛けていて、そこで集まって来る多すぎる注文をさばくために、1～2人の親方を探しにフィレンツェへ来ていたのだ。彼はすでに何度もグラッソに会い、ハンガリーへ行けば、ほんのわずかの歳月で大金持になれると言って、自分と同行するよう頼んでいた。グラッソはこの若者に「今まで何度会ってもノーと言って来たが、今度おれに起こったある事件と、お袋との間の行き違いとで、君と一緒に行く決心をした。邪魔が入らぬよう明日の朝発つぞ」と宣言した。相棒は用事で明日は無理だが、先に出発してボローニャで待っていてくれればすぐ追いつくと約束した。グラッソは道具箱と手持ちの金で出発の準備をし、ボルゴ・サン・ロレンツォへ行きボローニャから送り返す馬を借りて翌朝出発。母親あてに置き手紙をして自分はハンガリーへ行くので残して来た物を売るようにと伝えた。グラッソはボローニャで仲間と落ち合い、ハンガリーに着くと、わずかの年月で裕福になり、今も豊かに暮らしている。その後グラッソは二度フィレンツェに戻る。ブルネッレスキにフィレンツェを去った理由を問われると、順序良くこのノヴェッラを語り、実はこの悪戯のためにフィレンツェを去ったのだと答えたという。至高の神を称えよ。

以上がいわばこのノヴェッラの原型ともいえる形である。続いてそのヴァリエーションの一つを示しておこう。

2. LA REDAZIONE DEL CODICE PALATINO 200 要約⁶⁾

1410年のフィレンツェにペストの気配が生じて、翌年にもそれが続いたため、若者達は憂さ晴らしに集まり、各自の家で交替に夕食を共にして陽気なおしゃべりやゲーム（＝賭博）に興じていたが、単純だが腕の良い通称指物師グラッソと呼ばれるマリオットが客奮のためか用事のために、ここしばらくずっと集まりに欠席していた。ある晩グラッソの欠席が話題になると、人々はグラッソが他人よりも低い境遇のくせに彼らを見捨てたとか、グラッソは彼らにふさわしくないとかと憤慨した。するとブルネッレスキが、「皆の協力があれば彼を別人だと信じこませてやる」と言ったので、皆は同意した。他日ブルネッレスキはサン・ジョヴァンニ広場のグラッソの店（その上が住居となっている）を訪れ、グラッソの母モンナ・ジョヴァンナがボルヴェローザの

農園へ洗濯に行つたと聞くと、意味ありげに笑ってグラッソの疑惑を掻き立てる。グラッソがしつこく尋ねると、約40才の寡婦の母親が若い神父と浮気しているとほのめかす。グラッソが憤慨して神父をこらしめてやるという、ブルネッレスキは好きにやらせて知らない振りをするようすすめ、こっそりグラッソの店の鍵を取っておき、彼を誘ってアヌンチァータ教会へ参詣し、グラッソがひざまずいて祈祷している間にブルネッレスキは仲間の一人と先にグラッソの家へ行き、窓を開けて明かりを灯し、別の仲間にグラッソが広場へ来たら下から口笛を吹かせる。その合図と共にブルネッレスキはグラッソの母親、仲間はグラッソの声色を使い始め、グラッソが母が戻って来たのだと思って扉の外から耳を傾けると、神父との関係について母親を叱っている自分の声と、「お前は気が狂ったか、酔っ払っている」と反論する母親の声を耳にする。グラッソが驚いて、入り口をノックすると、グラッソの声をまねている男が、「誰だ」と尋ねたので、グラッソが「おれだ」と答えて「開けろ」と命じると、相手は「マッテオ、今晚おれは用事があるからよそへ行け」と言う。グラッソが自分はマッテオではなくて、家の主人のグラッソだと主張すると、相手は自分をカランドリーノ⁷⁾扱いする気かと怒り、それでもグラッソが戸を叩き続けたので、中の男が棒を持って階段を駆け降りて扉を開く。臆病なグラッソは広場に逃げ出して、下から自分とそっくりで自分の帽子をかぶった男を見て呆然とする。下から口笛を吹いた相棒が、中にいた男に「グラッソよ、何を騒いでいる」と尋ねると、中の男が「マッテオの奴が無理に中にはいろいろとしたからだ」と答える。この問答を聞いたグラッソはさらに驚く。その時ピエロ・ペーコリPiero Pecoriが通りかかったので、グラッソが「おれは誰だ」と尋ねると、相手は「獣だ」と答えて去る。その場にやはり仲間の一人セル・イアコボ・マンジャトロイア ser Iacopo Mangiatroia が通りかかったので、グラッソが近付くと、イアコボは「今晚は、マッテオ」と言う。グラッソが「おれはグラッソだ」と言うと、相手は「おれはお前がマッテオだと知ってるよ」と答え、家の入り口で「グラッソ」と呼んで入り口を開けさせ「お前の声は広場中響いているぞ」と言う。グラッソとグラッソの母親がそれに答える声を広場で聞いた本物のグラッソは生きた心地もない。そこへ商業裁判所の伝達使が5～6人の警吏を連れて現れる。その先頭にはアレッサンドリ商館（fondaco Alessandri）の若者がいてグラッソを訴えたので、一団はグラッソを捕え「マッテオよ、一緒に来い」と命令する。グラッソが「自分はマッテオではない、グラッソだ」と言い張ると、若者が「商館からあの毛織物を取った時にはそうは言わなかった。その後何度代金を催促しても馬鹿にするばかりだ。だからこいつを引っ捕えて下さい」と訴え、グラッソは裁判所に連行されて牢屋へ入れられる。囚人達は「マッテオ、良く来た」と歓迎した。グラッソは「明朝はここから出るぞ」と答えた。翌朝、裁判所の牢屋にグラッソの知人の一人フィリッポ・ルチェッラーイ Filippo Rucellai が来たが、窓際のグラッソを見ても知らんぷりをして、別の人を呼んでもらう。その男がやって来ると彼は、「マッテオよ、この人と秘密で話したいので席を外してくれ」と頼む。話が終わった時、グラッソは去ろうとするルチェッラーイに「指物師グラッソを知っているか」と尋ねる。ルチェッラーイは大の親友だと言う。グラッソが友人

マッテオのために彼にここへ来るよう伝えてほしいと頼むと、ルチェッラーイは喜んでそうすると約束して去っていく。商業裁判所の判事が囚人の名前を記した帳簿を持って来て、「マッテオはどれか」というのでグラッソは名乗り出る。食事時にボーイが、ワインの壺とパンその他の食べ物をマッテオのためだと言って持ってきて、マッテオの兄弟（以下兄とする）からだという。グラッソは礼を言い今日面会に来て欲しいと伝えさせる。22時（日没約3時間前）頃彼が去ると、やがて兄と称する二人の若者が来てマッテオのことを尋ねると、囚人の一人が「寝ている」というので、兄達は彼にグラッソを起こしてきてもらう。グラッソが眠そうに現れて、「良く来てくれた」と言うと、長兄が「心配していた通りのことをしてくれたな。お前のおかげでお袋も天寿をまっとうできなかった。しかしおれ達は兄弟だから、お前が態度を改めると約束すれば出してやろう」と言う。グラッソはお袋のことは悪かったが、もしここから出してくれたら、兄達の言うことを守ると約束した。兄達は「借金位はいくらでもはらってやるが、約束は守れ。さもないと今度は縛り首にされても鏝一文出さないよ」と念を押して去る。ボーイが壺やパンの籠を取りに来るとグラッソは「今晚は家で夕食を食べる」という。アヴェ・マリーアの祈りの頃兄達がグラッソを迎えに来て、サント・ジョルジョ（ママ）教会の向かいの家に連れ戻り、暖炉の火が暖かい一階の部屋に入れて、「夕食までここにいろ」と言って用事がある振りをして家を出ると、二人は向かいの教会の最近来たばかりの外国人の礼拝堂付き神父と会い、自分達の弟のマッテオは自分が指物師グラッソだという妄想に取り付かれたので、どうか家に来て妄想を除いてほしいと神にかけて頼んだ。神父が早速彼らと同行すると、兄達はグラッソを神父と会わせ、「マッテオよ、お前は過去を悔いて将来は行いに注意すると約束したな。そんならお前に神に祈ってもらいたい」と言い、有り難い神父を連れて来たから告解を受けるよう勧めて出て行った。神父がグラッソの隣に腰掛けて彼の過去の生活を尋ねると、グラッソは実は自分は指物師で名前もグラッソだと打ち明け、ところがあいつらは自分をマッテオにならせようとするのだと語る。神父は「そんな妄想を頭から追い出してマッテオだと観念しなさい」と叱る。グラッソは「一体私が告白するのは、グラッソの罪ですか。マッテオの罪ですか」を質問し、神父が「マッテオの」と言うと、「私はグラッソなのに、マッテオの罪を告白しなければならないとは珍しいことです」という。神父は「お前は間違いになりたいのか。他人になりたがるとは奇妙な妄想だ」と呆れるが、グラッソは神父にどうか一度グラッソに会わしてほしいと頼む。しかし神父は逆にグラッソの妄想を頭から追い出すように説得を続けた。そこでついにグラッソは諦めて自分をマッテオとしか考えないと約束した。その時神父は兄弟を呼び、「彼も自分の誤りに気がきましたよ。ご期待通りにするでしょう」と兄弟に報告し、グラッソもそれを認め、神父と一緒に軽い食事をして皆に送られて教会に戻る。彼らが帰宅すると、家にブルネッレスキが来ている。彼は6時間たっぷり眠らせる阿片入りの水の入った小さな水差しを兄達に与えた。兄達はグラッソと夕食にかかり、葡萄酒にそれをまぜてグラッソに飲ませると、グラッソは睡魔に襲われ食卓で眠り込む。ブルネッレスキが何人もの仲間と棺桶を持ってやって来てグラッソを中に入れ彼の家に連れ戻り、裸にし

て帽子だけをかぶらせて寝かせる。グラッソの巾着から店の鍵をとり、そこにある鉋や鋸等の道具類をすべて反対側に移し反対向きや裏返しにして店に鍵をかけ窓から梯子で出て行く。グラッソは夜明け間際に目を覚まし、ランプの明かりでどこにいるのかが分かる。前日のことを思い出してアヴェ・マリーアの祈りを捧げた。それからグラッソは起きて窓を開けてサン・ジョヴァンニ洗礼堂を見て、「神は誉められるべきかな、おれはまたグラッソで家にいた」と言う。店に降りて道具が反対側で逆さまや裏返しになっているのを見出し、「どうやら運命がおれに悪戯したらしい」と言う。そこへ昨夜兄弟だと名乗った二人の若者が来て「こんにちは」と挨拶し、グラッソが挨拶を返すと、「私達にはマッテオという弟がいるが、狂気に取り付かれて、自分是指物師グラッソだと言い張ってきかないのですが、昨夜家を出て行き先が分かりません。もしここへ来たら、彼の頭からその妄想を除いて、家に送り返して下さったらとても恩に着ます」と頼む。グラッソは向かっ腹を立てて、店で方付けていた刃物類を投げ出すと、「とっとと失せろ。グラッソやら、マッテオやらと、どうなってんだ。神にかけて、お前らを追っ払ってやるぞ」と叫び、店の戸を閉めると、マントを取ってコローナの宿に急いだ。その宿の向かいにはシジズモンド Sismondo 皇帝の最大の臣下である、ハンガリーの偉大なスパーノというあだ名のメッセル・フィリッポ・スカラーリ messer Filippo Scolari の屋敷があり、300騎と多くの貴族の仲間と共に滞在中だった。彼は当時様々な分野の芸術の職人をフィレンツェからハンガリーへ連れて行こうと企画して、職人達に好条件を申し出ていた。彼は指物師グラッソにも声もかけていたが、グラッソはそれまでずっと断って来た。彼はスパーノの屋敷の前に金庫や鞆を積んだ馬が沢山いるのを見て何かと尋ねると、「今朝出発するスパーノ様のものだ」と家来が答えた。そこで以前の勧誘を思い出したグラッソがスパーノを訪ねると、彼はすでに馬上にあった。グラッソはスパーノに敬意を表してらか、「もしあなたがよろしければ、今すぐお供します。馬を用意させて下さい」と申し出て、そのまま誰にも告げずに出発してハンガリーへ行ったが、そこで成功して大金持ちになった。フィレンツェ人の商人ジョヴァンニ・ベッシェが1446年ブダでグラッソに会った時、グラッソはこの話を順序よく語って、悪戯が彼を金持にしてくれたと言った。おしまい。アーメン。

第三章 アントニオ・マネッティのテキスト

さていよいよこのノヴェッラの完成形態とも見なしうるアントニオ・マネッティのテキストを紹介する。ただし、前章のテキスト1. が538行、2. が400行であるのに対して、本章のテキスト1. は1453行と約3倍の長さなので、要約は多少簡略にならざるを得ない。しかし一応内容の差異が分かる程度には紹介しておきたい。

1. LA REDAZIONE DI ANTONIO MANETTI¹⁾

以前フィレンツェには大変愉快な人々がいた。1409年のある日曜の晩、政府の関係者やいろいろな芸術の親方達がトマソ・ペーコリ Tomaso Pecori の家に集まって晩餐を取ったあと、冬の夜なので暖炉の前でおしゃべりしていると、一人が「今夜は指物師のマネット Manetto Ammannati が来ていないのは何故だ」と尋ね、誰かが彼は何かの理由で来られないと言っていたと言う。マネットとはサン・ジョヴァンニ広場に店があり、油絵のてっぺんの飾り、祭壇の飾り板等の腕の良い親方だった。とても愉快的な若者で、年は28才位でよく肥えて体格が良いのでグラッソ（でぶ）と呼ばれていた。いくら単純だが全く馬鹿というわけではなかった。たいてい来ている彼がいないので、その理由を詮索して結局気紛れのためだと推測し、少し侮辱されたような気になった一行は、何か悪戯を仕掛けて、夕食でも奢らせて賢くしてやれと相談した。その仲間に驚くべき才能と知力の持主として今も名高いブルネッレスキ Filippo di Ser Brunellesco がいた。彼は当時32才位の金銀細工師で、「今思い付いたんだが、彼に別人になったと思込ませたらどうだろう」と自信の表れでもある彼の癖のにやにぶ笑いを浮かべて提案したが、皆にはそれは無理なことのよう思えた。しかしブルネッレスキがその方法を説明すると一同は納得し、グラッソに自分が知人のマッテオ Matteo だと思込ませることにきめ、早速悪戯にとりかかった。翌日の夕方ブルネッレスキが、店を閉めて中で明かりをつけて働こうとしているグラッソを訪問してしゃべっていると、使いの男の子がブルネッレスキを探しに来て、二時間前に彼の母親が大事故に遭い死にそうだから、すぐ帰宅するよう伝えた。グラッソが一緒に行こうと言うと、ブルネッレスキは用があれば使いをやるから少し待っていてくれ、連絡がなければ帰宅してくれと頼み、グラッソをしばらくその店に残らせてから、自分はサンタ・マリーア・デル・フィオーレ教会に近いグラッソの家へ行き、ナイフで入り口をこじあけて中に入り、中から鍵をかけた。その頃グラッソの母はポルヴェローザの別荘へ洗濯や肉の塩漬けその他の用事に掛り、その前後に戻る可能性があった。グラッソはしばらくして店を閉め、ブルネッレスキとの約束のためそのあたりで時間を費やしてから、自宅に戻り階段を二つ上り自宅に着くと、錠がおりていたので、てっきり母親が戻ったと考えて戸口を叩く。中からブルネッレスキがグラッソの声色で「誰だ」と問い、グラッソが「グラッソだ」と言うと、中からグラッソの声が「マッテオよ、用事があるから帰ってくれ」という。それから同じ声が母親に2時間も遅く帰って来たと叱って夕食を急がせる。グラッソはその声に驚き、窓から呼ぼうと下に降りると、示し合わせたとおり今日でも有名な木彫師のドナテッロ Donatello が現れて、「マッテオ、グラッソを探しているのかい。彼は少し前に帰ったよ」という。そこでグラッソは大いにうろたえ、サン・ジョヴァンニ広場に引き上げて、カランドリーノになった方がまだましだと狼狽していると、決めておいた通り商業裁判所の役人の6人の警吏と一人の伝達使が現れる。彼らの一人がマッテオの債権者を装いグラッソに近付くと、「こいつを連行せよ。負債者のマッテオだから。お前を長いこと追っかけてやっと捕まえた。」と言ったので、一行は彼を捕えて連行しようとする。グラッソは捕えさせた相手に振り返り、「おれがお前に何をした。お前こそ人違いしている。おれはマッテオではなくて指物

師グラッソだ」と言い返して大柄な身体で暴れそうになった。相手はグラッソをじっと見詰め「おれを知らないだと。ちゃんと帳簿に記している。一年以上前に判決を得ている。今度こそ払わせてやる」と憤慨した。両者はたがい罵り合いながら、グラッソは商業裁判所に連行された。そこで公証人は帳簿にマッテオの名前を記す振りをした。この役人はペーコリと親しく、その指示にしたがっていて彼を投獄したのだ。そこで囚人達はすべて彼をマッテオだと信じこんで迎えた。たまたまグラッソを見たことがある者もいたが、みんなにマッテオと呼ばれていて様子も変わっていたので別人だと信じた。逮捕の訳を聞かれたマッテオは混乱して、「いくらか金を払わねばならないが、明朝早くには出て行くよ」と言った。囚人達は彼に夕食を勧め、彼も少し食べた。囚人達は牢屋の隅の敷き藁を分けてやり彼はそこでできるだけ眠ろうとした。債権者の振りをした若者に会ったブルネッレスキは、一切の成り行きを聞いて去った。グラッソは横になってからも思い悩み、家に使いをやってもし母とグラッソ自身がいたらどんなに笑われるかと考え、自分はマッテオなのか、グラッソなのかと、明け方近くまで思い悩んだ。また常に拷問にかけられる幻覚に悩まされた。翌朝他の人々と同様起き上がり、牢屋の入り口近くの窓のそばで知人の通るのを期待していると、ジョヴァンニ・ディ・メッセル・フランチェスコ・ルチェッラーイ Giovanni di messer Francesco Rucellai が裁判所に来た。彼も悪戯の仲間の一人で、グラッソとはとても親しく当時マリーア像の飾りのことで注文し、前日も店で彼と長いことしゃべり、グラッソが4日目に作品を渡すと約束したばかりであった。彼は裁判所に着くと、牢屋の窓が見える入り口から覗いたのでグラッソは嬉しくてにやにやした。ジョヴァンニが「何を笑っているんだ」と聞くと、グラッソは「何も」と言い、相手が自分に見覚えていない様子なので、「サン・ジョヴァンニ広場の裏で嵌木細工をやっているグラッソをしらないか」と聞くと、相手は「知ってるどころか、どんな小さな仕事でもみんなあいつに頼んでるよ。彼の訴えで牢屋にいれられたのか」と問い返した。グラッソはとんでもないと言って、彼に会ったら友人が牢屋に入っているのでは、一言声を掛けるよう言づてした。ジョヴァンニは「誰からだと言えよいいのか」と尋ねたので、グラッソは「ただそう言うだけでよい」と答えた。ジョヴァンニは「喜んで」と言って立ち去り、ブルネッレスキにすべてを報告して二人で大笑いした。グラッソはジョヴァンニ・ルチェッラーイが彼に見覚えがないのですっかり悲しんで、「自分はやっぱりマッテオになってしまった。もし人に知られたら、気違い扱いされて、子供に追いかけて回される。しかも覚えのない借金や毆から身をまもらねばならぬ。このことは人に相談することもできない」と思い悩みながら本物のグラッソが来るのを待っていたが、いつまで待ってもグラッソは現れなかった。当時借金の支払いが滞っていたために、名前は名誉のため記さないが、大変有能で文芸でも秀でた一人の判事(Giovanni Gherardi da Prato²⁾ がモデルらしい)が投獄されていて、グラッソのことはしなかったが、グラッソがひどくふさぎ込んでいるのを見て、慈悲心からはげましてやろうと考えて、「マッテオよ、そんなわずかの借金位で、ひどくふさぎ込んでいるね。誰か救い出してくれる人はいないのか」と尋ねた。グラッソは判事が尊敬に値する人物だと判断し、「ほっといてくれ」

と言う代わりに、「あなたは私をご存じないが、私はあなたが立派な方だと知っています。あなたのご好意に甘えて、私がこんなにふさぎ込んでいる訳をお話します」と述べて、涙を隠してすべての事情を打ち明けた。それから「私はあなたが古い時代と現代の多くの出来事や歴史を読んでおられることを知っていますが、こんなことを読まれたことがありましたか」と尋ねた。判事はグラッソが発狂したか、または悪戯のためかの二つに一つだと判断し、そうした例は珍しくはなく、さらに人間からアプレイウスのようにロバに変えられたり、アテオンのようにシカに変えられた例さえあると答えた。グラッソはそんなことはとても信じなかっただろうと言い、「もしも私がマッテオに変わっているとすると、マッテオはどうなっているのですか」と尋ねた。判事は「読んだり考えた限りでは、きっとグラッソに変わっている」と言う。そして自分の農夫(Lavoratore)にも同じことが起こったと言い、ウリッセ(オデュッセウス)の仲間がチルチェによって(ブタに)変えられた例もあげ、元に戻った例はあっても稀だと告げた。その時マッテオの二人の兄達が商業裁判所へ来て会計係の公証人にマッテオはいるかと尋ね、借金の金額を尋ねた後、少しマッテオと話してから借金の支払いをしたいと面会を求め、格子のところにいる囚人にマッテオを呼んでもらう。グラッソは判事の農夫はどうなったかと問うと、元には戻らなかったと言われてさらに落胆した。マッテオの長兄は格子の所へ来たグラッソの顔を見詰めて、「今までおれたちは何度お前に忠告し、何度牢屋や苦境から助けてやったことか」と説教を始め、おまけにマッテオが他人になりすまして逮捕をのがれようとしたことを叱る。ただし自分達の名誉と老いた母の頼みで今回に限り借金を肩代わりしてやるが、今後は一切知らない、と脅かす。そして人目に付かないよう今夜アヴェ・マリーアの祈りのころ連れに来てやると約束した。その言葉にグラッソはてっきり自分がマッテオに変身したものと信じ込み、必ず連れに来てくれるよう懇願した。再び判事の許に戻り、農夫が元に戻らなかったことを確かめると、兄が連れ出しに来てくれるが、その後どこへ帰れば良いのかと相談した。もしも自分の家に戻ってももしもたまたまそこにグラッソがいたら、きっと自分を気違い扱いするだろう、たまたもし自分がいなかったら、帰って来た母はあちこち探していたはずではないだろうか、と語った。判事は笑いを我慢しながら、兄と称する者達について行ってどうするか見るように、そうすれば悪いようにはなるまいと勧めた。判事はそう言いながら彼から離れて笑いたくてたまらなくなり、もう我慢できなくなった。やがてマッテオの兄達は裁判所に着いて、大笑いしながら予定の時間を待ち、グラッソの相談相手となった判事が自分の問題を片付けて、堂々と裁判所を出て行くのを見ていた。会計係の公証人と債権者との問題が片付いた振りをして、公証人は鍵を持って牢屋へ行き、「マッテオはどれか」と呼ぶとグラッソは「私です」と進み出た。公証人は兄達が負債を肩代わりしてくれたという理由を宣言して釈放した。外はすでに暗く、グラッソは判事の助言に従ってサンタ・フェリチタ教会のそばの坂の上り口のマッテオの兄達の家に向かう。途中、前ほど厳しくはない口調で、母の嘆きぶりを伝えて二度とあんな真似はせぬと誓わせ、一体どうしてグラッソだなどと言いだめたのかとか、今でもグラッソだと思っているのかとか、ひょっとしたら我々は別人を連れ

出したのではないかとかと尋ねるので、グラスソは返答に窮し内心二人について来たことを後悔していたが、マッテオだとみとめるのも辛く、また今更グラスソだと言い出したらどこにも戻れないと考えて、二度とああいう態度はとらないと約束し、彼からグラスソと呼ばれた時には返事をしない。やがて家につくと彼らは暖炉のついた一階の部屋にグラスソを入れ、これ以上辛い思いをさせないため母親には会わせないといい、夕食まで待つように指示した。一人は暖炉の前に残り、もう一人が彼らの教区司祭である神父の許へ行く。そして「あなたは私達の精神的父親ですから、相談にまいりました」と言って、自分達三人兄弟は多分よくご存じの通りすぐ近くの者だが、その内のマッテオは負債のために商業裁判所で逮捕され、実は前にも兄達が牢屋から救出してやったことがあったが、何故か今度はひどく気落ちして半ば正気を失い、自分がサンタ・マリーア・デル・フィオーレ教会の近くに家がある知人の指物師グラスソだと信じこんでしまい、どうしてもその妄想を除くことが出来ないことを告げた。人に気付かれないう牢屋から自宅へ連れ戻したが、もしも人に知られたら一生狂人扱いされるだろうし、老いた母親に会わせるわけにもいかず、結局立派な良い人で、私達の恥を他人にもらす恐れもない司祭様に家に来てもらい、説得してもらうことにきめたと語る。狂気のまま死んでは救われないので、それは司祭の任務だとも見なし得るというわけである。司祭はその通り、それは自分の義務だと認めたが、危険はないかと心配する。兄は弟は狂ったというよりも、妄想に取り憑かれただけで、少し道に迷っているだけだから、母親にも知らせないつもりだと説明した。司祭もその程度ならと、兄と同行した。司祭が「今晚は、マッテオ」と話しかけると、相手も「今晚は」と答えたので、司祭は「君と話をしに来た」と言い、手を取って彼の隣に座り、彼の教区の司祭で精神的父親だと言い、教区の住民の面倒を見に来たと説明して、マッテオが牢屋に入れられて気落ちして発狂しかけたそうだが、そういうことはよく起こりがちだから忍耐と用心とで耐えよ、と諭した。それから彼が自分はマッテオではなく、指物師グラスソだと主張して、6フィオーリーノのために自分を失ったことを特に非難して、今後は兄達をはじめマッテオを愛する者の名誉のため、二度とそんなことをしないよう約束してくれと頼む。それから自分が自分より立派な親方で大金持のグラスソだと主張することは、自分が劣っていると認めることで、それは一生拭えぬ不名誉な汚名となり、子供達がついて来て囃し立てるだろう。だからもっと自分と家族を大事にして人間らしくなり、妄想をすてるようにと熱弁を振るって忠告した。グラスソは有り難い忠告に、自分がマッテオであることを疑わず、言われたとおりにすると約束するが、ただ一つお願いしたいことがあると言い、本物のグラスソと話すことが出来れば、自分は即座に納得できるので、是非彼に会わして欲しいと頼んだ。司祭はにやりと笑い、「それでは話は逆だ。君はまだそんなことを言っているのか。一体君はグラスソとどんな関係があるというのか。彼に会って何になるのか」と懸命に説得して、ついにグラスソに渋々諦めさせ、兄達を呼んでマッテオはなかなか納得しなかったが、うんと苦勞してようやく何とか納得させたと伝えた。兄は司祭に一枚のグロッソ銀貨を渡して感謝した。司祭は別れを告げて教会に戻った。司祭が説得しているころブルネッレスキがやって来て兄の一

人からすべての事情と判事が牢屋にいたという事実を聞くと、水差しに入れた飲物を渡して、それはかなりの長時間意識がなくなる阿片だから、夕食の際ワインか何かに入れてグラッソに飲ませるようにと頼んだ。すでに日没後3時間半を過ぎたころ、兄達は夕食を取り始めてグラッソに無味の阿片を飲ませ、同時に自分が他人だと主張することは、本人だけでなく兄弟にも迷惑で、すでにメルカート・ヌオーヴォで人違いのために後ろ指を指されたと語る。やがて阿片が効き始め、グラッソは「生まれてからこんなに眠いと思ったことはない」という。そしてやっとのことで服を脱ぐと豚のような大いびきで眠りこける。あらかじめ決められた時刻にブルネッレスキはかつての晩餐の仲間が悪戯が大好きな6人の仲間とともにやって来て、グラッソを編み籠の中に入れると、衣類や持物とともに、まだ彼の母親が別荘から戻っていないグラッソの自宅へと運び、いつもと反対の向きでベッドに寝かした。それから店の鍵を取ってその中に入ると、店の中の道具類を本来と反対の位置に反対向きにひっくり返して置き、店を閉め鍵を戻して、各自がそれぞれの家に引き上げた。翌朝グラッソはサンタ・マリーア・ノヴェラのアヴェ・マリーアの鐘の音とともに目を覚まし、自分の部屋にいることに気づき、グラッソに戻ったことをほとんど涙が出るほど喜ぶ。しかしベッドに逆向きに寝ているのに気づき、昨夜のことを思い出して、昨夜が夢か、現在が夢かと迷う。マッテオとして扱われ牢屋にいたことからすべてを思い出して不快になり、しかしグラッソに戻ったことを喜び、どちらが夢か分からずに神に祈る。店の鍵をとって中に入って見ると、すべての道具が反対側に置かれて反対向きにひっくり返されていた。そこでじっくりしていろいろ考えているところへマッテオの兄達が現れ、一人が「こんにちは、親方」と挨拶したが、グラッソは答えず「何を探していますか」と尋ねる。すると一人が自分達にはマッテオという弟がいるが、負債で逮捕されたショックで頭が変になり、自分は指物師の親方のグラッソだと信じ込み、何としてもその妄想を捨てないので、昨夜サンタ・フェリチタ教会の司祭に頼んで説得してもらい、彼はもう二度と妄想にふけらないと約束して皆と機嫌良く夕食を食べて寝たのに、今朝はその姿が見えないので、あるいはこちらに来てないかと思って寄って見たのだという。グラッソは「もし子供のことなら、ミゼルコルディア病院へ行った時しらべてやるよ」と言い、相手の顔をじっと見ながら、道具を片付けていてちょうど手に持っていた鉋を両手で握り締めたので、相手はぶっつけられることを恐れて早々に立ち去った。グラッソはもはやマッテオの兄達が彼をマッテオだと見ていないことを知る。訳が分からぬままマントをつかんで教会に向かう。休日ではないので人は少ないが、当時いつもそこで仕事の問題を議論していて、自分達が建設中のサンタ・マリーア・デル・フィオーレ教会の中にいたブルネッレスキとドナテッロに出会った。ブルネッレスキはグラッソが何一つ疑っていないことを確信して、上機嫌の何食わぬ顔で彼に近付き、「お袋のことは何でもなかったよ。マッテオ・マンニーニのことを聞いたか」と、グラッソともドナテッロともつかず尋ねる。ドナテッロが何かと問うと、ブルネッレスキはグラッソに向かい、彼らが出会ったあの夜マッテオは広場で逮捕されて、自分が指物師グラッソだと言ったため大騒ぎになり、商業裁判所でも同じ騒ぎが起きて、皆で大笑いしたと語り、それに

ついて何か知っているかと尋ねた。そるとドナテッロが何も知らなかったと言い、ブルネッレスキは大騒ぎになったからグラッソが知らないはずはないのだが、と述べた。グラッソは驚いて大きな溜息をつき、それは初耳だという。そこへブルネッレスキの指示通りマッテオが現れ、彼らに挨拶した。グラッソは彼の兄達が彼を探していたことを教えた。ブルネッレスキとドナテッロが彼が逮捕された事件を語ると、マッテオはそんな覚えは全然なく、今朝別荘から帰って来ると、母から質問せめに会い、兄達から身に覚えのないことを問われたという。ここしばらく見なかったがどこへ行ったのかというブルネッレスキの質問に答えて、最近の自分の行動を語る。「私はある商会に6フィオーリーノの借金があり催促されていたが、他方エンボリの人に8フィオーリーノ貸しているので返すあてはあった。そこで土曜日に債権者に次の火曜日に返すと約束したが、債権者がすでに判決を得ていたので（その前に負債を返すべきだったがお金がなかった）私は面倒を避けてチェルトーザの別荘に引きこもりそのまま二日間そこに居て、つい1時間前まで帰ってはこなかったのだ。ところがその間に、私の身に前代未聞の出来事が起こったようだ。私は火曜日の夕食後出発して、農夫に迷惑をかけないためにガッルツォで一杯やって夜中に別荘につき、明かりをもらって床についた。そして今朝起きると、農夫は私に昨日どこへ行ったのかと尋ねたので、私はここにいて明かりをもらったと答えると、それは一昨日のことで、昨日は一日中姿が見えず、てっきりフィレンツェへ行ったと信じていたのだという。そこで曜日を聞くと今日は木曜日だと答えた。要するに私は二晩と丸一日中眠りこけていたのだ。」それを聞いたブルネッレスキとドナテッロはとても驚いた振りをしたが、グラッソが内心最も驚き狂いそうになる。マッテオは続けて、「ところがさっき出会った商館の見習い社員は6フィオーリーノ催促するどころかおれを見て謝り、逮捕させたのは自分ではないと弁解した。そこでようやくおれの借金を払ったという兄達やお袋のことばの意味が分かったのだ。見習い社員から聞いてみるとおれはずっと牢屋へ入っていたということだ。フィリッポ（ブルネッレスキ）よ、この謎を解いておくれ」といった。それからグラッソに向かい、「おれはその時間ずっとあんたの家とあんたの店にいたんだ。つまり眠っていると思っていた間中ずっと別人になっていたということだ」という。ドナテッロはよく分からないというが、ブルネッレスキは分かったという。グラッソは一言も口をはさまず考え込み、他の三人は顔を見合わせて笑いをこらえた。ブルネッレスキはグラッソの手を取り、お互いよく見えるように、みんなでサンタ・マリーア・デル・フィオーレ教会の合唱席へ行こうと提案して、これは近ごろ聞いた一番すばらしい話だからと、一緒に聞くことにした。当時クーボラ（丸屋根）の下に入入手前の二つの大きな柱の間にあった合唱席で、ブルネッレスキがまずフィレンツェで起こったことを明らかにして、それからマッテオに起こったことを聞こうと提案、ドナテッロがマッテオに、「君はグラッソの家のドアを叩き、それから広場で逮捕されると自分はグラッソだから人違いだと言い張ったんだよ云々」と説明すると、マッテオは「君は冗談をいつてる。おれは別荘にいたから、そんなことをした覚えは全くない」と驚き、さらに自分にはパラージオ（役所）に友人の公証人がいて逮捕免除証明を作り、別荘まで送ってくれたから昨日までは

滞在できたし、今朝早くプリオリーとアルテの審議会が開けなかったのでまだ何日か別荘に滞在しても良いという許可を送ってくれた。だから逮捕などされるはずはなかった、自分がここへ戻って来たのもそのためだ、と主張した。それから彼はグラッソを指して「おれは本物以上に本物らしい夢の中で、こいつの家にいたようだ」と話し始め、「お袋も自分のお袋のようだった。そこで食べたりしゃべったりして、起きると店へ行き、いつもグラッソがやるのを見ているように指物師の仕事をした。ただし道具は自分の流儀に置き換えた」という。グラッソが気が狂ったようにマッテオを見ていると、彼はさらに「仕事をして見たが、ただ一つのやり方しかできなくて、自分がグラッソそのままであることが求められているようだった。飯に出た後も店に戻り、夜まで働いて店を閉めて寝たが、家も全くそのまま自分が本当にグラッソになったようだった。」と語った。グラッソは一時間なにもいわずにいたが、普段はあら捜しの好きなブルネッレスキがあっさりとマッテオの言葉を受け入れ、ドナテッロもブルネッレスキと一緒にマッテオの言葉にこの上なく驚いた振りをした。グラッソは口をとがらせて首を振り、「これはとても珍しい出来事だ。その間のことは自分も話すべきだが、君達に狂人扱いされるから黙っておくよ。フィリッポよ、この話をやめにしよう」という。グラッソはマッテオの言葉を信じそうになったが、夢の辛さに大差があると思う。そこでグラッソはボルヴェローザから戻っていない母親がその時期本当に自宅に戻っていたかどうかを確かめようと考えて、彼らに別れを告げた。皆はもう笑いがこらえられなくなっていた。ブルネッレスキが「いつか一緒に夕飯を食おう」といってもグラッソは何も答えず立ち去った。残された三人、とりわけブルネッレスキとドナテッロは笑いが押さえられなくなり、気が狂ったように笑った。グラッソはすぐに店を閉めてボルヴェローザへ行き、母親が一度もフィレンツェに戻っていなかったことを知り、フィレンツェに戻って色々考えている内に、悪戯にちがいないと確信し、ブルネッレスキが関係しているに違いないが、防ぎ様がなかったことを残念に思った。そこで彼はかつてテルマのベッレグリーノ親方の許で同僚だった青年からハンガリー行きを勧められていたことを思い出した。その青年はそれより前にハンガリーへ行き、スパーノというあだ名のフィリッポ・スコラーリ Filippo Scolari に大事にされていた。スパーノとは元来フィレンツェ出身だが、当時ボヘミア王カルロの息子で後に皇帝となった賢明なハンガリー王（シ）ジスモンド王の軍隊の総大将で、度外れた愛国者だったのでフィレンツェから知性であれ技術であれ何らかの伎倆の持主がやって来ると、全員に宿を与えて歓迎した。青年は当時ハンガリーで頼まれた大量の仕事の注文をこなすため同業の親方をハンガリーへスカウトするためにフィレンツェへ来ていて、ハンガリーへ来ればすぐ金持ちになれるとグラッソにしきりに勧め、グラッソはずっと断り続けていた。グラッソは彼にばったり出会うと、「今まで君に勧められてもずっと断っていたが、今度おれの身におこったある事件と母親との行き違いが原因で、おれはハンガリーへ行くことにした。邪魔がいると困るので明日の朝発つ」といった。相手は喜び、まだ少し用事があるので、先に行ってボローニャで待っていてくれと頼み、打ち合わせを済ませた。グラッソは店に戻り、ボルゴ・サン・ロレンツォへ行きボローニャについたら

送り返すための馬を借りて来て、翌朝それに乗って誰にも一言も告げずに出発した。店に残ったものを処分して生活資金を得るように指示し、自分はハンガリーへ行って永年にわたって戻らないという趣旨の母親あての置き手紙を家に残しておいた。なるべく人目を避けたが、やむを得ずあちこちで会った人々は、みな笑ってあの事件を話題にされていて、間接的に悪戯だったことを知った。まず彼を逮捕させた見習い店員から、ついで牢屋で相談した判事から事情が伝わった。ブルネッレスキが判事と会って愉快におしゃべりして大笑いしたからで、仕掛けたのがブルネッレスキだということがフィレンツェ中に伝わったのだ。それはグラッソが考えていたことと一致した。こうした推理が彼の決意をますます固くして、彼は相棒と共にハンガリーへと向かった。夕食の仲間達は集まりを続け、次回もトマソ・ペーコリの家集まったが、あの悪戯を笑うために例の判事を招いて様子を聞くことにした。判事は喜んで参加し、関係者は全員集まって情報を提供した。判事はアプレウスその他すべての忠告を披露して人々を大笑いさせた。その晩餐は判事の意見によると、私人は勿論、どんな皇帝や王様の宮廷でもめったに見られない豪勢な御馳走と飲物の宴会だったという。そしてブルネッレスキの配慮と手回しのすごさに、この悪戯から身を守るほど狡猾な人はいないだろうと見なされた。グラッソとその相棒はハンガリーに着くと、僅かの間にその能力に応じて大いに稼ぎ、大金持ちになった。グラッソはフィレンツェ出身のマネット親方と呼ばれて、大評判を得た。生まれつき王様のように気前が良く、特にフィレンツェ人には気前が良くて多数のフィレンツェ人をハンガリーへ引き寄せたスパノの用事を、彼は相棒とともにすべて引き受けた。その後彼はフィレンツェにも何年か毎に何度もやって来て何ヵ月も滞在した。彼が初めてフィレンツェへ帰って来た時、彼はブルネッレスキから何故ハンガリーへ行ったのかと尋ねられたので、彼でないと知らない事実も加えてこのノヴェッラを語ると、ブルネッレスキはかつて一度もなかったほど気持ち良く笑った。そこでグラッソはブルネッレスキの顔をじっと見詰めて、「君達のほうがおれよりもずっとよく知っていて、君はサンタ・マリーア・デル・フィオーレでおれを散々からかったじゃないか」といった。ブルネッレスキが「でも大目に見てくれよ。このことは君がジスモンドやスパノのためにしたどんな仕事よりも君を有名にし、10年後も君のことがフィレンツェで語られるよ」と答えると、今度はグラッソが笑った。ブルネッレスキは「あのころでもおれは君をきっと金持ちにしてやれることを知っていた。できればグラッソになりたいと思っている人が、現在一杯いるよ。そして自分に悪戯を仕掛けてほしかったと思っている人がね。君はこの悪戯のお陰で金持ちになり、皇帝やスパノやその他の君主や領主の友人になれたのだ」といった。この後もグラッソは戻るたびにブルネッレスキと会い、判事や見習い社員の様子を細かく思い出して吟味した。何故なら笑われるべき最大の部分はいわばグラッソの心中にあったからだ。ブルネッレスキがそのことを何度も繰り返して語り、それを聞いて人々もその後語り伝えた。ブルネッレスキの語った話は、そのままでは伝わらなかった。その死後、何度もこの話を聞いた人々がそれを記録した。ルーカ・デッラ・ロッビアその他の人々（8人の名前³⁾が列挙されている）とその他にも多くの人達が記録を企てた。しかし三分の一の

部分はなく、大部分が断片的で、嘘だらけだった。とはいえそのお陰で完全に湮滅することはなかったのだ。神に感謝せよ。アーメン。

第四章 結びに代えて

以上で本ノヴェッラの代表的形態とも言える3テキストの内容の要約を紹介した。筆者は他の多くの分野の場合と同様、イタリアで古くから発達した学問分野の一つである文献学のテキスト・クリティークの問題についても、発言する資格がない門外漢であることをまず断った上で、粗筋の構成に関してのみテキストの比較を行うことを許してもらわねばならない。だがそうした比較に入る前にまず注意しておきたいことは、プロカッチョーリがまとめたこれまでの出版のリスト¹⁾によると、これら3テキストがバランスよく平均して刊行されてきた訳ではなく、また近代的常識に囚われたわれわれがともすれば誤解しやすいように、マネット作とされているテキストⅠ。(以下Mとする)が完成当初から他のテキストを圧倒してひろく読まれて来たという訳でもないという事実である。まず数字上のバランスについて考えると、テキストⅡ。(以下Pとする)は1927年に今世紀最大の文献学者の一人であるミケーレ・バルビが『イタリア文献学研究』1のpp.133-44に発表したのが最初の版²⁾で、以後その復刻版やプロカッチョーリの版を含めてもわずか4回しか刊行されていない。だからPは長年にわたって大衆の目に触れることはなく、むしろ今世紀の学術的産物と見なした方が、実情に近いであろう。さらに意外なことは、我々が決定版と考えがちなMの刊行も年代的には意外と遅く、作品は当初もっぱらテキストⅢ。(以下Vとする)を中心に刊行されて来たという事実である。つまりこのノヴェッラの出版は15世紀におけるBatolomeo Davanzati(以下D)の8行詩形式の作品のそれ³⁾が最も古いものとされるが、ついで1516年以降まず『デカメロン』の付録として引き続いて4回刊行され、⁴⁾さらに独立した作品として、あるいは時には『ノヴェッリーノ』の付録などとして刊行され、16世紀だけで何と13回も出版されたが、いずれもV(実は最も重要な問題の一つであるVそのもののテキスト問題は、筆者の手に余る)ばかりであったとされているのである。17世紀においてもやはりVのみの出版が7回を数え、新しくV中心ではあるがMが部分的に加えられ、さらにDavanzatiに関する記述が添えられた版(V+M+D)が初めて現れたのがようやく18世紀も半ば近い1744年のことだとされている。18世紀にはV+M+Dの刊行が4回行われたのに対して、従来通りのVのみの刊行も3回行われている。19世紀でもVのみの刊行は8回、V中心にMの一部を加えた版(V+M)が3回を数えている。そしてMのみからなるクルスカ学会による監修版が登場するのは、ようやく1820年のことに他ならない。引き続いて1830年、1856年と続くが、この1856年版のMを刊行したのが、学術書や辞書の出版社として評価の高いフィレンツェのル・モニエ Le Monnier社だということを考慮すると、Mという版の確立自体極めて近代的で学術的な事業であったことが了解し得るのではないだろうか。さすがに19世紀にはM単独の版が5回となり、20世紀には

Mが11回（プロカッチョーリのテキストを加えると12回）に対して、Vは2回（プロカッチョーリを加えると3回、さらにD+Vが1回）となって完全にMがVを駆逐してしまう。このようにある時期まで、そしておそらくこうしたノヴェッラの舞台が読者にとって十分身近な現実であり、ノヴェッラが学問研究としてではなく真の娯楽として読まれていた19世紀半ばまでの期間の大半において、MではなくVがノヴェッラの代表的なテキストであり続けたという事実は、少なくとも筆者には極めて興味深く思われる。

すでに見たとおりPは現実にあまり流布してしなかった版なので、一応後で別個に触れることにして、まずVとMともおおまかに比較すると、両者における最も大きな違いとは、悪戯自体の構成には双方とも大差がないにもかかわらず、グラッソが本来の自分に戻ってからの部分がMにおいて大幅に書き加えられているという事実である。Vではグラッソは悪戯の解明などそっちのけにして、母親にも会う事なくハンガリーへ向かって出発しているが、Mではブルネッレスキが関係者を集め、特にマッテオ自身に登場させて、一応のつじつま合わせを行っている。そのつじつま合わせにおいて、グラッソとマッテオは入れ代わっていたことにされており、マッテオはブルネッレスキの描いた筋書通り、グラッソといれ代わって過ごした自分の時間を、夢と現実の双方を区別しながら説明している。ロションが指摘しているとおり多少のほころびはあっても、一応筋が通る論理的な説明がなされており、それがフィクションであることを証拠立てるために、グラッソはわざわざ母親に会わなければならなかった。逆にグラッソはそうすることによって、すべてが悪戯であったことを確信して、ハンガリー行きを決意する。こうした演劇的とも言える整合性と、それに伴うブルネッレスキの行動の一貫性および力量、さらにグラッソとブルネッレスキの暖かい関係の永続、全体の雰囲気の明るさ等が、このテキストを性格付けているものだと見なすことが出来るであろう。そうした祝祭的・非日常的であると同時に和解的な部分を欠いている分だけ、Vは素朴であると同時に、露骨に残酷でもあると言えるかも知れない。事実グラッソが悪戯が自分を金持ちにしてくれたと認めているのは、PとMだけでVにはそうした言葉はない。

しかし筆者の考えでは、実際に残酷な中世イタリアの悪戯ノヴェッラの伝統を最もよく伝えているのは、むしろバルビが紹介したP（＝テキストⅡ）であって、まず『デカメロン』の粹組⁵⁾のようなベストにまつわる発端や、ブルネッレスキがグラッソの母と田舎の司祭との関係をほめかしていること等、まさにポッカッチョ、セルカンビ、セルミーニ等の猥雑なノヴェッラの雰囲気最濃厚に漂っている。そして人間関係に関してもより激しく端的に中世都市的であり、グラッソは一応悪戯のお陰で金持ちになれたことを認めているが、その仕掛人達を許したという形跡は感じられず、むしろその短い素っ気ないテキストに表現されている人間関係は、一挙に残酷な復讐に走りかねない、ベックが「暗い」と評した⁶⁾セルカンビとも共通した荒涼としたものである。事実Vにはなかった、訪ねて来たマッテオの兄達がグラッソが持っている刃物に脅えるという場面は、このテキスト以後に初めて加えられたものとされているのである。しかもこ

のPにおいてのみ、グラッソがその後フィレンツェに戻ったとする記録がなく、この話もフィレンツェ商人がブダに滞在していたときに、グラッソの口から聞いたものとされているのだ。だから勿論ブルネッレスキとの和解の場面もありえない。こうした意味で筆者には、Pこそ最も中世イタリアの悪戯ノヴェッラの伝統にちかいもの、いわばそうした伝統に影響されて、Vがデフォルメされたものと感じられるのである。

そうした性格のPと比較すると、Mはかなり対照的な性格を有していることを認めなければなるまい。すでに見たようにロシオンはこの作品に対する「魔法の鍵」の存在を否定しているのだが、それにもかかわらず、一定のメッセージが盛り込まれていることを認めている。そのメッセージとは何かを、まず以下で簡単にまとめておく。まずロシオンによると、このノヴェッラには特に印象的な点が二つあり、それは悪戯の原因の軽微さとそれに対する復讐としての悪戯自体の残酷さの不釣り合いなこと、および結局最後には悪戯の被害者にとって有利な結果をもたらすこととなったその解決の独創性だとされている。⁷⁾ 結局この悪戯はブルネッレスキの賛美であり、フィレンツェの（ダンテ・ペトラルカ、ボッカッチョをつぐ）新しい三冠（ブルネッレスキ、ドナテッロ、マサッチョ）の肯定を意味しているのだ。マネッティがこの時期にブルネッレスキを賛美したことにもそれだけの理由があり、マネッティが支持し保護を受けているメディチ政権にとってその必要があったのだとする。要するにロシオンによると、悪戯（beffa）とは階級闘争を含みながら行われている芸術家同士の喧嘩が転位したものだと思われており、マネッティが賛美しようとしたブルネッレスキの権威は、1450年から75年にかけてロッセッリーノ Rossellino⁸⁾ 派のために危機にさらされたが、ロレンツォが保護しているブルネッレスキの後継者ジュリアーノ・ダ・サン・ガッロ Giuliano da San Gallo⁹⁾ の権威の確立によって回復したのだとされている。ブルネッレスキの賛美とは、一方では論理的に整合している悪戯に含まれている理性の賛美であるが、同時に彼がグラッソを極めて困難な実験によって罰することが出来たという事実の証言でもあるわけで、グラッソを悩ました残酷さは、実はその前代未聞の実験への挑戦の結果なのである。だからこの悪戯は、コムーネの従来制度や法律を一応尊重しながら、あくまで合法的に改革を進めて来たコシモ・デ・メディチとその子孫達の政治的態度とも合致するものだと見なし得るものである。勿論このノヴェッラ自体はメディチ家が支配権を握る以前のフィレンツェを舞台にしており、政治とは直接関係がない。しかしやはりここには現実の政治が反映しており、それは一方ではグラッソこそその典型である、小アルテに属する小市民階級に対する、ヒエラルキーを尊重せよという保守的な社会的コードを含んでいるものと見なされる。¹⁰⁾ 悪戯の仕掛人のブルネッレスキ、ペーコリ、ルッチェラーイ等がほとんど支配階級であることから、この悪戯の階級的含意は明らかなとされている。しかし同時にこの作品がグラッソの成功物語であることも無視してはならない。つまりこのノヴェッラは今記したような保守的コードとともに、少数のエリートに対して個人的成功の可能性をも示唆しているのである。しかもそれは当時のフィレンツェにおいては、決して夢物語やお伽噺ではなかったのである。さらにもう一つロシオンが重視してい

るのは、特にテキストMにおいてこのノヴェッラは、従来のノヴェッラの限界を越えて、史上初めて悪戯の被害者の心の動きつまりその内面を描いているという事実である。そのことがこの作品を悪戯の歴史における画期的なものにしているとロシオンは見なしている。

最後に筆者が進めてきた悪戯ノヴェッラの研究成果に基づいて、この作品を分類して位置付ける作業を行いたい。筆者はこれまでに、しばしば悪戯の被害者の持つアウトサイダーの性格を重視し、悪戯が閉鎖的な共同体におけるアウトサイダーの排除の手段であったことを指摘して来た。¹⁾ グラッソの場合、彼が特別な性格的欠陥の持主でもなく、顕著な弱者でもなく、ただ晩餐に欠席したというだけの理由で悪戯の犠牲者となっている。ある意味で、彼こそまさしくフィレンツェ市民中の市民と呼び得る程の内部の人間である。しかし晩餐への欠席によって集団から一時的に脱落したため、もはやその集団に属していないと見なされ、彼に一時的にアウトサイダー的性格が与えられたと考えることは、決して無理なこじつけではない。しかしそれはあくまで一時的かつ暫定的な性格なので、悪戯自体もグラッソがマッテオの家で眠りこむと共に、幕を閉じることになる。やはりここでも、被害者排除の動きが活発に進められているといえる。何故なら投獄こそまさに排除そのものだからである。ここでも悪戯ノヴェッラの被害者学はほぼ通用するのである。

では悪戯の仕掛人に関してはどうかであろうか。それは単独者によるトリック・スター型と、グループ型と、両者の折衷型とに分類し得る。このノヴェッラは、ブルネッレスキという強烈な個性の持主の存在によって、伝統的なグループ型からトリック・スター型にかなり移行しているが、しかし共同作業であることは変わらないので、やはり折衷型と見なさざるを得ない。いずれにせよ、このノヴェッラにも中世コムーネのノヴェッラに共通するアウトサイダー排除の論理がかなり色濃く残っていることは明白である。

注

第一章

- 1) Filippo Brunelleschi (フィレンツェ1377～同1446) フィレンツェ芸術の革新者として、またフィレンツェのドォーモのクーボラの設計施行者として名高い彫刻家、建築家。
- 2) Antonio di Tuccio Manetti (フィレンツェ1423～同1497) その略歴等は本章に後出。マネッティといえ、人文主義の思想家で、佐藤三夫教授の著書『イタリア・ルネッサンスにおける人間の尊厳』(東京 有信堂 1981) でその『人間の尊厳 (*De dignitate et excellentia hominis*)』が紹介されたジャンノッツォ・マネッティ Giannozzo Manetti (フィレンツェ1396～ナポリ1459) が名高いがそれとは別人。筆者は迂闊にもかつて何となく両者を混同していたので、念のため。なおもう一人アントニオ・ディ・マネット・チャッケリ (1402/5～60) という、ドゥオモのクーボラ施工に木工師として協力した人物がいて、本ノートのマネッティとしばしば混同されていることが、愛知産業大学造形学部の石川清氏の『イタリア・ルネッサンス期の建設活動における職人組織の形成と発展に関する研究』(愛知産業大学 文部省科研報告書 1992 pp.56-8) において指摘されている。
- 3) Réunies par André Rochon, *FORME ET SIGNIFICATIONS DE LA «BEFFA» DANS LA LITTÉRATURE ITALIENNE DE LA RENAISSANCE*, Vol.I, 1972 Paris, Vol. II, Paris 1975.

- 4) Id., Vol. II, pp. 211-376, André Rochon, UNE DATE IMPORTANTE DANS L'HISTOIRE DE LA BEFFA: LA NOUVELLE DU GRASSO LEGNAIUOLO.
- 5) Baldesàr Castiglione (1478-1529), *Il libro del cortegiano*. なおその論文とは注3) の Vol. II, pp. 171-210, J. Guidi, *FESTIVE NARRAZIONI, MOTTI, ET BURLE (BEFFE) L'ART DES FACÉTIES DANS "LE COURTISAN"*
- 6) A cura di G. Ferrero e M.L. Doglio, *NOVELLE del Quattrocento*, Torino 1981, pp. 587-628. このテキストと本ノートのテキスト1. はほとんど等しいが、教会名の表記等にわずかな差が見られる。
- 7) Rochon, op.cit., pp. 326-7.
- 8) 注3) の Vol. I, pp. 45-97, M. Plaisance, LA STRUCTURE DE LA BEFFA DANS LES CENE D'ANTONFRANCESCO GRAZZINI.
- 9) M. Barbi, *Antonio Manetti e la Novella del Grasso Legnaiuolo*, Firenze (Salvadore Landi) 1893.
- 10) A cura di Paolo Procaccioli, *LA NOVELLA DEL GRASSO LEGNAIUOLO*, Parma (Fondazione Pietro Bembo/Ugo Guanda Editore in Parma), pp. 99.
- 11) A cura di Michele Barbi, *Una versione inedita del Grasso Legnaiuolo*, *《Studi di Filologia Italiana》*, I (1927), pp. 133-44.
- 12) Rochon, op.cit., pp. 339-376.
- 13) V と Palatino 200 は Id., pp. 239-240, M は p. 251.
- 14) 同じアントニオ・マネッティが記したとされているブルネッレスキ伝で、1887年にミラネージによってノヴェッラや他の著作と共に刊行された。*OPERETTE STORICHE/EDITE ED INEDITE/DI/ANTONIO MANETTI/MATEMATICO E ARCHITETTO FIORENTINO DEL SECOLO XV/RACCOLTE PER LA PRIMA VOLTA/E AL SUO VERO AUTORE RESTITUITE/DA/GAETANO MILANESI /FIRENZE/SUCCESSORI LE MONNIER/1887.*
- 15) *The life of Brunelleschi by Antonio Tuccio Manetti*, Introduction, Notes and Critical Text Edition by Howard Saalman, The Pennsylvania State University Press, 1970.
- 16) Giuliano Tanturli, *Par la paternità manettiana della 《Vita di Filippo Brunelleschi》*, *《Rinascimento》*, s. II, x (1970), pp. 5-25.
- 17) Rochon, op.cit., pp. 244sgg.
- 18) Id. p. 255.

第二章

- 1) 第一章注10) Procaccioli, op.cit.
- 2) テキストのみで Id. pp. 5-61.
- 3) Id. pp. 65-78.
- 4) Id. pp. 81-97
- 5) 注4) と同じ。
- 6) 注3) と同じ。
- 7) 『デカメロン』の第八日第3、6話、第九日第3、6話に登場して仲間に騙される愚かな画家。第九日第3話では妊娠したと信じこまされる。

第三章

- 1) 第二章注2) と同じ。
- 2) Giovanni Gherardo da Prato (プラート1367～フィレンツェ1445) ダンテの公開講義をした法律家で、II Paradiso degli Alberti の作者とされている。
- 3) Antonio di Matteo da le Porte, Michelozzo, Andreino da San Gimignano (ブルネッレスキの弟子で相続人), Scheggia, Feo Belcari, Luca della Robbia, Antonio di Migliore Guidotti, Domenico di Michelino.

第四章

- 1) Procaccioli, op.cit., pp. XLVII～LXIV.

- 2) 第一章注11) 参照。
- 3) NOVELLA DI MATTEO E DEL/GRASSO LEGNAIUOLO PER/BARTHOLOMEO DAVANZA/TI
CITTADINO FIORENTINO/ALSAPIENTISSIMO GIOVA/NE COXIMO DIBERNARDO/RUCELLAI (s.n.
t. [Firenze, Francesco di Dino?])
詩形のものとしては Bernardo Giambullari の作品 (フィレンツェ 1955) が残されている。
- 4) 以下の出版回数は本章注1) のリストによる。
- 5) 『デカメロン』の枠組に関しては、拙稿、紙の上の宮廷——中世・ルネサンス期イタリアにおけるノヴェッラ集の枠組の変遷——、『イタリア学会誌』、40号、東京 1990、pp.44-69。
- 6) C.Bec, Giovanni di Jacopo Sercambi et son 《Novelliero》, in *Les Marchands Ecrivains à Florence 1375-1434*, Paris 1967, p.195.
- 7) Rochon, op.cit., p.327.
- 8) Bernardo Rossellino (セッティニャーノ1409- フィレンツェ1464) とその弟 Antonio (セッティニャーノ1427- フィレンツェ1479) 等の彫刻家、建築家。
- 9) Giuliano da San Gallo (フィレンツェ1445-1516) ブルネッレスキの影響を受けたマニエリスタ建築家、ゴンディ宮殿等で名高く、ルネサンス期の宗教建築の原型を作ったとも言われる。
- 10) Rochon, op.cit., p.336.
- 11) 拙稿、G. セルミーニ (Sermini) の心の中の障壁——中世コムーネのノヴェッラの共通のモチーフを支える心性構造の一例——、『池田廉教授定年退官記念論文集』、大阪 1993所収参照。

(1994年 5月10日 受理)